

全生

題字

国泰寺派管長 澤大道老大師

平成二十八年 正月

編集・発行

全生庵
平成28年1月
第24号

〒一〇一〇〇〇一

東京都台東区谷中五丁目四番七号

電話 (三八二二) 四七一五

FAX (三八二二) 三七一五

編集人 巖 洋 俊

印刷所 三宏印刷株式会社



全生庵開山越叟禅師筆「喝」

新年明けましておめでとうございます
旧年中は格別のご法愛を賜り御礼申し上げます
本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます

本年は私も臨済宗の宗祖、臨済禅師没後一一五〇年の年に当たります。臨済禅師は中国の唐の時代に活躍した禅僧です。禅師は十五、六歳のころ出家され、はじめ仏教の学問的研究に精進され、後、黄檗おうばく禅師のもとで禅の修行を積まれ、その法をお嗣うしぎになられました。その言行は弟子たちによって記録された「臨済録りんさいろく」によって知ることができます。

「喝かっ」は禅師の代名詞といってもいい言葉です。「喝」という言葉自体は無義語であり、何の意味もありませんが、この無義語のなかに真理がひらめき、禅の真髄があるのです。しいて説明するならば、ギリギリのもう言葉では言い表すことのできないところの表現とでも言ったらよいでしょうか。

禅師は修行者を指導する手段としてよくこの「喝」を活用されたと伝えられています。

本年は京都、東福寺での遠忌法要、京都、東京両国立博物館での展覧会、各所での坐禅会等様々な記念行事が開催されます。皆さんも是非この機会に臨済禅師の禅にふれていただければ幸いです。

全生庵住職 平井正修

春彼岸法話

鎌倉円覚寺派管長 横田南嶺 老師

前号の続き……

「与仏有縁 仏法僧縁」。これはご縁ですね。仏様が私たちの拠り所です。法というのは仏様の教えです。お経を学ぼう、仏教の話を聞こうという気持ちが必要な支え、力になります。そしてもう一つは僧、僧というお坊さんのことだと思いがちですが、教えを学ぶ集まりのことです。ですから我々出家したお坊さんといえば、皆様方のように在家の信者も含めて僧です。みんなが集まるのが、拠り所となり支えとなるのです。震災の後など、独りでは生きる力が湧いてきません。でも、みんなが集まることによって、頑張っているという力が湧いてくるものです。

「常楽我浄」常に楽しむ我れ浄し、と書かれています。私は、「われを忘れてひとのためまごころこめてつくすこそつねに変わらぬたのしみぞまことのおのれに目覚めては清きいのちを生きるなり」と訳



させて頂いています。先ほどのスマートフォンのお話をしましたが、スマートフォンは自分だけが楽しんでいますね。自分だけで楽しんでいて、他人に迷惑が掛かることもある。それに自分だけの楽しみというのは、多分すぐ飽きます。しかし、他人に何かしてあげるといふ楽しみは、尽きることがありません。そしてその楽しみはいつの時代も変わることがありません。そのような生き方をしていくことが真に清らかな生き方であります。

「朝念観世音 暮念観世音」朝に観音様を念じ、夜に観音様を念じて。

「念念従心起」念念というのは一念一念、心より起こる。この心はお互いの本心、観音様の心であり、真心です。真心から行動を起こしていく。

「念念不離心」一念一念、その真心から決して離れないようにすること。そのような気持ちで生きていきましょう。

こうした教えを説いているのが延命十句観音経です。改めて学んでも、お釈迦様の教えの一番大切なところがよくまとめられているなと思います。この延命十句観音経を、白隠禅師が熱心に広められ

ました。白隠禅師が六十歳の時に、ある人が突然訪ねてきたそうです。そして白隠禅師に延命十句観音経を書いた紙を渡し、このお経を広めて欲しいと頼みます。白隠禅師が訳を尋ねるところへ答えました。「死んであの世に行つて、地獄の閻魔大王の前に連れて行かれました。そうしたら閻魔さんがこう言うのです。「お前はまだここへくるのは早い。もう一回娑婆にもどれ。そしてお前は延命十句観音経を広めるのだ。しかしお前の力だけでは無理だ。駿河国に白隠という和尚がいるから、力を借りて延命十句観音経を広めろ。」そして生き返り、こうして和尚を尋ねたのです。」それを聞いた白隠禅師はこのお経を一生懸命広められた。そのお蔭で臨済宗の僧侶は今でもこのお経を誦みます。一心に延命十句観音経を唱える功德を白隠禅師がまとめられた書物も残されています。江戸時代の平戸の殿様松浦静山公の日記には、「江戸に参ると、皆が延命十句観音経を一生懸命唱えていて大変流行っている」と書かれています。

さて東日本大震災の起こった年は、自然災害の多い年でした。三月は大震災、夏は新潟の豪雨があり、私もお見舞いに行きました。九月には紀伊半島を台風が襲い大水害が起きました。私の郷里でもあり玄峰老師が筏流しをされていた熊野川は、ダムや堤防による水量管理もなされ決壊はしないと言われ

ていきましたが、この度の大水害では大勢の方が亡くなりました。東日本大震災に比べると規模が小さいので、関東ではあまり注目されなかったかもしれませんが。私は生まれ育った町で大勢の方が亡くなりましたから、お見舞いや慰霊に何度か駆けつけました。ちょうど一年経ったときにお参りに行くと、新宮市主催の慰霊祭をやっていました。行政主催の慰霊祭ですから、お経を誦むことが出来ませんので、私は個人的にお参りに行きたいと願いました。そうしたらありがたいことに地元の臨済宗の和尚様方が、慰霊碑の前で慰霊祭を開いてくださいました。市の主催の慰霊祭は二十人程の参加でしたが、私が参列した慰霊祭は百人程の参加がありました。さすがに市も放っておけないということで、職員を派遣してくださいました。椅子やテントを用意して、市長も参列して思いがけず大慰霊祭になりました。その時にも思いました。

行政機関にお身内の方がお勤めの方はお気を悪くしないで欲しいのです。市の慰霊祭であれば、市長のご挨拶、県会議員の挨拶、そして黙祷。そのような流れですね。しかし日本人は、お経を誦み焼香をした方がお参りした気持ちになるのではないのでしょうか。

慰霊祭に延命十句観音経の紙を持っていき、短いお経ですから、練習しなくても皆で唱えることができます。この時、遺族の

方にお目に掛かりました。ひとりはお母さんと一緒に家ごと流されてお母さんが行方不明になってしまった。未だにお母さんは行方不明のままです。これは声の掛けようがない。大変辛いですね。

もうひとりのご婦人は、旦那さんが消防士として殉職された方でした。東日本大震災でも救助活動の末、殉職された方は大勢いらっしゃいますね。この方にも声の掛けようがなかった。一言一言「頑張って生きてください。」とお話して、延命十句観音経を渡しました。それから、遺族の方にはお会いしませんでした。

昨年上梓しました延命十句観音経の本を、ご主人を殉職で失ったご婦人に送って差し上げました。お盆の頃でしたからお線香などと一緒に。水害から丸三年経ちましたが、いかがですかと手紙も添えました。そうしたら、非常に丁寧にご返事を頂きました。ご紹介致したいと思います。

先日はお手紙やご本など御心のこもった品々を頂き、ありがとうございます。主人が旅立ってから三年。私たちはたくさんの方々に支えられて元気に暮らしています。不思議ですね。感謝の心で朝晩拝み、延命十句観音経を唱えるようになってから、毎日良いことばかりが続いているように思います。

どうということかという、心の世界の大切

さを知りました。今まではテレビで台風や雨の被害で亡くなった方のニュースを見ても他人事のように思っていました。今はほんの少しですが、大切な人を失くされた人の気持ちにわかることができるようになりました。今回のきっかけで新しい絆が生まれたり、昔の絆が復活したり、お互いに支え合い思い合う繋がりの中で、生活がより豊かになっていく不思議に驚いています。今まで私は支えて頂いていた。支えて頂いた私が、これから他人の支えになれるように、観音様の心を広めていきたいと思えます。それから今年には主人の作っていた田んぼにひまわりを植えました。

二年前の慰霊祭のときの老師のお言葉「残された者の務めは元気に明るく生きていくこと」とこの言葉を支えに生きてきました。いつか主人と会える日が来たならば、笑顔で会えるように毎日暮らしていきたいと思っています。本当に温かいお心遣いありがとうございます。

ご主人は田んぼをやりながら消防士をしていた。殉職してからは田んぼに手が回らなかつたのではないのでしょうか。今年は少し余裕が出来て、田んぼにひまわりを植えた。田んぼ一面にひまわりが咲いている写真を手紙に入れてくださいました。

何も拝むものもない、何も唱えるものもないという中で、悲しみを乗り越えていくこと

は本当に大変です。そう考えると仏教は素晴らしい教えだと思えます。仏壇・位牌に朝晩手を合わせることができ、延命十句観音経を唱えることができます。それで悲しみがなくなるわけではありません。けれど悲しみを抱きながらも、またいつかご主人と一緒になれると願い、その時に明るく元気な姿で会いたいと願う。そして「残された者の務めは元気に明るく生きていくことだ」という言葉を胸に生きてくださっているのです。これこそが延命十句観音経の大きな功德だと感じました。

一心にお祈りを始めて、最初は亡くなった方のご冥福を祈る。そうして一心に仏様の手を合わせてお祈りしていると、今度は祈るこちらの心が変わってくる。これが大きな功德でございます。お返事の中の、「お互いに支え合い思い合う繋がりの中で、生きていく」という言葉に胸を打たれます。私は、この言葉をこれからたくさんの人に伝えていきたいと思っています。ご静聴ありがとうございます。

坂東三十三観音霊場巡礼紀行

小林茂生

坂東三十三観音巡礼は、昨年で結願を迎え、今年には十月九日から一泊で長野県の「善光寺」

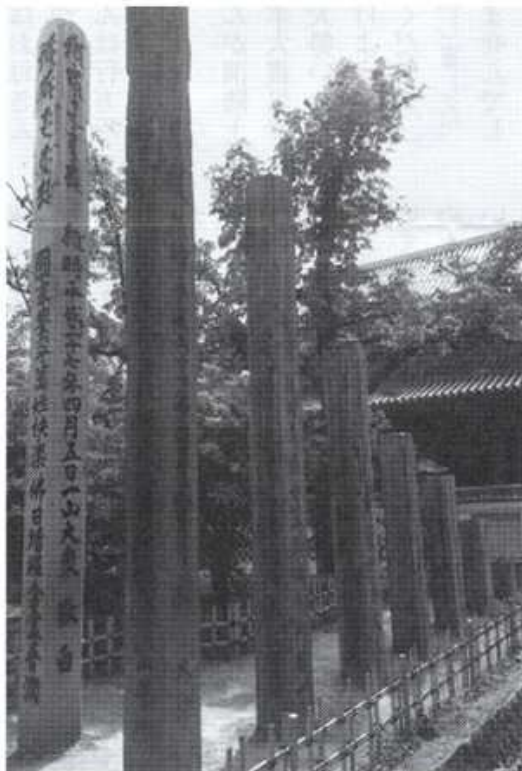
北向観音」にお礼参りに訪れました。善光寺だけの参拝では「片参り」と言われ、北向観音も一緒に巡る慣習が広く知られています。地図の上では南北に相対し直線距離にして約三十五キロ、善光寺は南向きである為に來世往生を、北向観音は現世利益を祈願する寺と伝わっています。

初日の朝、優しい陽射しを浴びて、バスは一路善光寺へ向かいます。車窓に映る山並みや木々の紅葉、稲の収穫などの風景に秋のおとずれを感じます。三時間ほど善光寺に到着、大きな国宝の本堂が威風堂々とそびえています。

本尊は一光三尊阿弥陀如来。縁起によるとインドから百済を経て日本に伝来し、六四二年に本田善光によって長野の地へ遷座され、伽藍が造営されました。寺名の由来は、開基本田善光の名を取り「善光寺」と名付けられます。創建当時の善光寺は、大変貧しく灯明の油にも事欠く有様でした。或るとき、如来様が現れ白毫より光明を放つと不思議なことに油の無い灯心に火が灯りました。これが現在まで灯り続け、御本尊前の立派な六角燈籠の中で、千三百年以上の水きに渡り、今を照らし「不滅の常燈明」と呼ばれています。一光三尊阿弥陀

陀如来は、中央に阿弥陀如来、右側に観音菩薩、左側の勢至菩薩が一つの光背の中にお立ちになる像であり、絶対秘仏です。本堂の下には「極楽浄土への錠前」に触れる事が出来るという「戒壇巡り」があります。ご住職長男の正晃くん（五歳）と共に手を握りその戒壇巡りをしましたが、いつもは元氣いっぱいの子供も、真つ暗の「戒壇巡り」は怖い様子でした。

今年のご開帳の年に当たり推計七百万人以上の参詣で賑わったと聞きました。御開帳に際し、本堂前に回向柱が建立されます。高さ約十メートル、太さ四十五センチ四方、重さは三トンにもなります。「善の綱」と呼ばれる白い紐によって回向柱と前立本尊が結ばれ、柱に触れることで、直接前立本尊に触れ



（歴代回向柱納所）

ると同じ功德が得られると言われていま

す。回向柱は、ご開帳後には境内の歴代回向柱納所に移されます。昭和三十年からの回向柱計十本が一直線に並び、古い柱は地上三十七センチ程になって朽ちています。何万人もの参詣者の願いや祈りが込められた回向柱が朽ちていく様子は、土に還るといふ自然の教えがあり、ご開帳に訪れた人々とも逢えた気持ちとして心が安らぎました。

御本尊さまの前で般若心経を奉納し、参道にある宿坊の兄部坊にて精進料理をいただきました。どの料理も手が込んでおり、豆腐のウナギもどきは絶品でした。

一行は善光寺を後にし、栗の名産地小布施へと向かいます。その道中、「関山慧玄／無相大師誕生の地」を通りました。無相大師は、京都の臨濟宗妙心寺の開山であります。その遺徳をしのび故郷の地を眺め小布施へと進みます。小布施では栗の収穫時期と重なり多くの栗製品を楽しみ、本日の宿である戸倉上山田温泉へと向かいました。

二日目、上山田温泉を出



《善光寺山門前にて》

発し、北向山・北向観音堂へとバスを走らせます。ここは長野県上田市の別所温泉地にあります。天台宗常楽寺が所有・管理しています。本尊は千手観音菩薩で天長2年（八二五）開創されました。温泉地ということもあり、参拝前に清めを行う洗水は全国でも珍しく天然温泉が引かれており、暖かいお湯で清めることができます。そして参拝すると「北向」の由来がわかります。言葉通り本堂が北向であり他に例がないそうです。「北斗星が世界のよりどころであるように、我も一切衆生のよりどころとなつて救おう」という観音様の誓願により、北を向いているそうです。また、境内には縁結びの霊木として樹齢千二百年の愛染カツラがあり紅葉が秋の訪れを知らせていました。

次に、小諸へ向かい昼食に長野名物「信州そば」をいただきます。小諸城址懐古園を散策しました。参拝も終わり、これで無事、坂東三十三観音巡礼の旅も終わりを迎えることができ、一行はお

顔も清々しく信州を後にしました。

今回の旅でも多くのご縁や気付きを頂くことができ心より有難く感じられた旅でした。観音巡礼に参加された方々をはじめ、有縁無縁の多くの皆さまの今後が益々幸福で平和でありますように心より祈念してこの旅の締めくくりしたいと思います。 合掌

住職の著書が出版

十二月十日 住職の新著「見えないもの、を大切に生きる」が幻冬舎より刊行されました。

健康、若さ、愛、友情、お金、地位、名誉……世の中に「確かなもの」などなく、見えないものを見る「目」を持てば、心が自由になり、人生が豊かになります。

禅の教えから目に見えないものの大切さを説く一冊です。是非ご一読下さい。

「見えないもの」を大切に生きる。

生活と心を調える
禅的思考のすすめ

健康、若さ、愛、友情、お金、地位、名誉……世の中に「確かなもの」などありません

平井正修

行事報告

大施餓鬼会

七月八日 お盆の大施餓鬼会を厳修いたしました。当日は猛暑にもかかわらず、多くの檀信徒の皆様にお参りいただきました。

鐵舟忌

七月十九日 当庵開基山岡鐵舟居士每歳忌法要を厳修いたしました。法要後は、東京大学史料編纂所の西脇康氏に「山岡鉄舟と浪士組」と題し講演をいただきました。

うらめしや

七月二十二日より九月十三日まで東京藝術大学美術館にて「うらめしや」、冥途のみやげ展」が開催されました。全生庵所蔵の幽霊画をメインとしさらに各方面より幽霊画を集め、大規模に行われました。また八月一カ月間は例年通り当庵でも圓朝まつり幽霊画展を行い、例年全作品を公開することはなかったですが、今年は所蔵作品を全て公開することが出来ました。

雀一人会

八月二日 歌舞伎役者中村芝雀丈・落語家林家正雀師匠による掛け合い噺、三遊亭圓朝作「芝浜」が口演されました。

圓朝忌

八月十一日 落語協会主催の三遊亭圓朝居

士每歳忌を厳修いたしました。法要後には三遊亭金馬師匠による奉納落語が仏前に奉納されました。

圓朝座

八月十一日夕刻 鈴々舎馬校師匠による落語会が行われました。毎年圓朝居士のご命日に圓朝作品を口演している会で、鈴々舎馬校師匠が「怪談牡丹燈籠」、林家正蔵師匠が「双蝶々」を口演されました。

圓朝寄席

八月十六日 今年で三十一回目となる町会主催の圓朝寄席が行われました。出演は三遊亭鳳楽師匠、三遊亭円橋師匠、三遊亭好楽師匠でした。

怪談会

八月二十九日 昨年に続き女流怪談師牛抱せん夏さんによる「怪談会」が行われました。怪談師二人が「怪談牡丹燈籠」二人語り」を現代風アレンジして口演されました。

秋彼岸法要

九月二十日 お彼岸入りの日に秋彼岸檀信徒総供養の法要を厳修いたしました。法要前には住職の法話がございました。

先代和尚二十七回忌

十月三十日 先代住職平井玄恭和尚二十三回忌・夫人平井宏子七回忌の法要を、三島・龍澤寺後藤栄山老師を導師にお迎えし厳修致

しました。

全生亭

十一月三日 第十二回全生亭が行われました。今回は金原亭馬玉師匠が圓朝作「にゅう」、金原亭馬生師匠が圓朝作「塩原多助一代記」その四」を口演されました。

尊攘派展

十一月二十一日より新年二月十四日まで日野市立新選組ふるさと歴史館において「幕臣尊攘派・浪士組から江戸開城へ・山岡鉄舟らの軌跡」展が開催されます。お寺からも多くの資料を提供しておりますので是非ご覧ください。一月十六日には執事の本林義範が講演いたします。

八坐禅会

お釈迦様が十二月八日の朝に明けの明星をご覧になってお悟りをひらかれた因縁によって十二月一日朝八日朝まで朝晩坐禅会を行い、八日朝には坐禅後、成道会を厳修いたしました。

全生庵ホームページ

<http://www.theway.jp/zen/index.htm>

メールアドレス

zenshoan@cup.ocn.ne.jp